

美少女ルートが全て正解だとは限らない

@Eiji

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平凡な主人公、矢井亮介がちよつと残念な青春を送る物語である。

目次

監禁	1
新生活	4
一人暮らしは何気に辛い	6
帰り道	10
少女の独白（白鷺千聖）	13
番外編〜聖夜の一時〜	17
おっとり系美少女が現実にはいない件について	20
自己紹介って何で緊張するんだろうね？	23
あまり会いたくない人ほどよく会うよね	26

監禁

（主人公 side）

やあ、俺の名前は矢井亮介（やいりょうすけ）。生まれつきアルビノで髪の色が白で目の色が赤って言う以外は何処にでもいる普通の中学二年生だ。

とまあ主人公が言いそうなセリフを言ってみただけだが、おふざけ無しで俺の質問に答えて欲しい、有名女優に監禁され、手足を縄で縛られている状況でどうやって脱出すればいいか教えてくれない？（ガチ）

??? 「あら、もう目が覚めたのかしら？」

はあこの声からしてきつとアイツ何だろうな。

亮介 「千聖！何でこんなことするんだよ?!」

千聖 「そんなの決まってるじゃない、亮介貴方を私の物にするためよ」

亮介 「はあ?!ふざけるなよ！俺はお前の告白を断ったじゃないか！」

そう、俺はこいつの告白を断った、つまりフツたのだ。

千聖 「…いいえ、そんなのう、嘘よ…」

亮介 「いいや嘘じゃない」

千聖 「い、いや言わないで!!」

ど、どうしたんだいきなり怒鳴り散らして。

千聖 「そ、そうだわ。それなら既成事実をつくってしまえばいいのよ。そうすれば社会からも認められる」

既成事実だと…それはまずい。

亮介 「やめろよ！千聖今の時期にそんな事したら人気なくなるってことはお前が一番良く分かってるだろ！」

千聖 「…別に良いのよ。私には貴方が必要なの。亮介さえ居てくれたら他に何も要らないのよ」

亮介 「考え直せ！千聖こんなことしたらいつか絶対に後悔する」

千聖「いいえ、後悔なんてしないわ。むしろ貴方が私の物になってくれない方が後悔するわ」

千聖「さあ準備は出来たかしら？」

と千聖が目虚ろにして迫ってくる。

クックソどうすれば良いんだ・・・そうだ。

亮介「・・・分かったよ。お前の物になる」

千聖「ほ、本当に？」

亮介「ああ本当だ」

千聖「なら、その・・・シテもかまわないでしょう？」

やっぱりその話題になるよな・・・。

亮介「もちろんだ、そのかわりこの縄をはずしてくれないか？」

千聖「ネエ、ナンデソウナルカナ、ワタシハアナタトツキアツテシアワセニナリタイダケナノヨ、ソノタメニハアナタノテアシヲニゲラレナイヨウニシバツテ、カンキンスレバイチバンデシヨ」

亮介「お、落ち着け千聖。別に俺は逃げようと思っっている訳じゃない」

千聖「ジャアナンデ？」

亮介「その、折角するんだ。ちゃんと千聖お前を抱き締めたい、ちゃんと自分から千聖にキスをしたい」

ど、どうだ？

千聖「そ、そうなの。なら仕方ないわね。今から縄をはずしてあげる／＼／＼」

縄が緩み始めた、このまま順調に進めば・・・。

亮介「はああッ」

千聖「きやあ!？」

よし、縄がはずれた。

亮介「じゃあな千聖、女優やってるくせにこんな分かりやすい演技に引っかかるとわな」

取り合えず、この家から出たあとは親に相談して海外に引っ越そ

う。千聖に会わなければ最悪シベリアでもいいや。いくら千聖でも外国で俺の位置を特定することは不可能だろ。

〈side out〉

〈千聖side〉

千聖「亮介：：アナタワタシニウソヲツイタノ？」

アア、ナンデ？リヨウスケナンデアアナタハワタシカラニゲタノ？ワタシガ女優ダカラ？アナタノコノミニアワナカッタカラ？：：フツドレモチガウハコタエハカンタンキツトダレカカラオドサレテイタノネ。

マツテテリヨウスケスグニムカエニイクカラ。

〈side out〉

新生活

やあ皆さんこんにちは、不運なことに有名女優に色々大切な物を奪われかけた、矢井亮介だ。

一年前俺は両親に外国に引っ越しをしてほしいと頼んだところ、父の仕事の都合上フィンランドに家族全員で引っ越しをしないといけないらしくタイミングが合っていたらしい。神はまだ俺を見捨てていなかったようだ。

あれから一年俺は15才になった。まあ日本にいたら、受験勉強で忙しい中学三年生だっただろう。

因みに俺の家のお隣さんはちよつと変わっている。それは…。

※(『』)になっている時はフィンランド語を喋っていると思って下さい

い m () m

???' 『リヨウスケさくん』

亮介 『何だ、イヴこんな朝から』

イヴ 『はい!!今日はモデルの仕事はお休みなのでリヨウスケさんに日本語を教えて貰おうと思ったので!』

この子は俺の家のお隣さん若宮イヴ、好きな言葉は武士道、日本人の父とフィンランド人の母を親にもつハーフモデルやっっている。フィンランドや日本でも有名らしくこの前の雑誌の表紙にも載っていたな…。

それよりもずっと気になっていることがある…。

亮介 『日本語を教えるのは良いんだけど… どうやって 家の中に入ったの?』

そう、俺の家には父は仕事で、母は友達と一緒に買い物に行っているため実質俺は留守番状態なのだ。

だから家に不審者が入ってこないようにドアや窓に鍵をかけておいたはずなのだが…。

イヴ 『あれ?ドアは開いていましたよ?』

亮介 『え、本当?』

イヴ『はい、最初はインターホンを押していたのですが、しばらくしても家から出てくる様子も無かったので家に入ったのですが…』
ヤバい、何だろうこの罪悪感。完璧に俺のミスなのに イヴが物凄く申し訳なきように頭を下に向けているから余計に罪悪感を感じるじゃあ無いか…。

亮介『あ、いや別に気にしなくても良いぜ。チャイムを押していたのにきずかなかった俺が悪いし』

イヴ『本当ですか?…』

亮介『ああ本当だから』

イヴ『ありがとうございます!』

亮介『じゃあ日本語の勉強をするか!』

イヴ『はい!よろしくおねがいします!』

夕方

イヴ『今日はありがとうございました』

亮介『こちらこそ、楽しかったよ』

イヴ『それではまた来週もよろしくおねがいします』

亮介『分かった、それじゃあ』

ふう〜、帰って行ったか…。それにしても彼処まで勉強に集中できるとはな…。そろそろ両親とも帰ってくる頃か。

父／母「ただいまあー」

亮介「お帰りなさい」

父「おう、亮介。家族全員に関わる大事な話がある…。」

家族全員に関わる大事な話?まさか…。

亮介「離婚…。」

父「違うわ!母さんにはもう話したんだが三ヶ月後日本に帰ることになった」

どうやら神は俺を見捨てたらしい…。

一人暮らしは何気に辛い

（亮介 side）

はああああ ついに日本に帰ってきてしまった…。

空港でフィンランドから日本に行くときにイヴとフィンランドの学校の友達全員に見送ってもらったのが懐かしいよ… はあ平和で楽しいフィンランドに戻りたい…。

その時イヴが泣いて俺に抱きついて来たのは驚いたな…。まあ俺とハンネで落ち着かせて事なきを得たが、その時にイヴと次に会ったら結婚を前提に付き合おうと言う約束をしちまったからな…。

まあ、次に会う頃にはイヴにも彼氏くらい出来て約束の事なんて忘れて普通の友達に戻ってるだろう。

問題はここからだ… 日本のも前の家に戻って来た。つまりそれはもう一度千聖に会うと言うことを意味する…。

また千聖に会ったりしてみろ。絶対に監禁されて、最悪 手足を切断されるぞ。

一応この事を両親に話してみたが… 考えすぎだと言われた。

まあ両親がこう言うのも無理もない。千聖は外堀を埋めるのは得意らしく両親からはかなりの信用を得ていた。

それに加えてアホな両親は千聖に家の鍵を渡してしまった…。それが俺の監禁された一番の原因なんだけだな。

読者の皆も分かっているだろうが、このまま何も千聖に対する対策を立てずに日本に帰って来たらまた同じことの繰り返しになるのだ。

当然俺も対策はしてある… 母に頼んで高校からは一人暮らしがしたいと言った。

当然母も反対した。しかし俺の必死の思いが伝わったのか俺の意見を了承してくれた。

夜に父が帰ってきて俺が一人暮らしをすることを話した… 父は学生時代学生寮で暮らしていたため余り反対はしなかった。むしろ賛成してくれた。だが父はこうも言っていた… 『どんなことでも止

めたいと思っただらいつでも止めて良い。ただし絶対に後悔だけはするな』と

珍しく父親らしいことを言ったものだと思っただが父なりの背中の押し方なのだろう。

そう言う訳で俺は実質中三で一人暮らしをすることになった。

父曰く『高校受験なんてすぐだからな。今のうちに一人暮らしに慣れておく必要がある』との事だ。…確かに一人暮らしは保証人が居れば中学生からでも出来るからな。正直な話ちよつと一人暮らしまでには時間がかかると思っていたがこちらの方が好都合だ。

因みに俺は今、自分の実家の部屋の荷物をアパートの自分の部屋に移してる所だ。

家具は基本的な物は備え付けてあったので、持ってくる荷物はそこまで多くなかった。

亮介「よし、一通り終わったし何処か適当に買い物でもするか」

↳商店街↳

いやー懐かしいなこの賑やかな感じ、山吹ベーカリーに羽沢珈琲店ちっちゃい頃良く通ってたな、来週辺り寄ってみようかな。

それにしても久しぶりに来たせいか結構買っちゃったな。

?????? 「ちよつと離してよ!」

?????? 「ア、ア、良いから黙って来いよ!」

ヤベエ明らかにトラブルの匂いしかしかない。…見た感じ茶髪の天然パーマのギャルっぽい子がプリン頭のヤンキーに絡まれてるな。

他の商店街の人達も止めようとはしているが怖くて見て見ぬふりをしてるな。

仕方ない止めるか。

止めるにしてもやっぱ話し合いが一番だよな。

亮介「あのくすみません」

プリン頭「ア、アなんだテメエ」

あら、このプリン頭さん明らかに激おこぷんぷん丸じやあないですかやだろ。

亮介「いやーちよつと貴方のせいで周りが迷惑しているので止めていただけないかと」

よし、完璧だ。このプリン頭が運良く話が分かる奴なら……。

プリン頭「へえー、だそうだ」とギャルっぽい子に言う。
は？

亮介「貴方に言ってるんですけど」

プリン頭「この女が俺の誘いに乗らないのが悪いんだよ」

ア？この男今なんつった？そこの女の子が悪いって？

ザケンナ……。

亮介「オイ……」

プリン頭「アア？つてど、どうしたんだ」

ナンダアドウヨウシヤガツテ？

亮介「チンピラア…… テメエ腕イツポン持ってくクライの覚悟ハデキテンダロオ……」

今の俺がどう言った表情、言動をしているかは正直分からない。きつと酷いものなのだろう……。だが今の俺がすべきことははっきりと分かる……。

プリン頭「チ、チンピラだとテメエ!!」と男はバタフライナイフを出し、俺に向かってふり下ろした。

美しく銀色に輝いてる物……俺はそれをナイフだと一瞬で理解出来た……。

だが……。

亮介「アタンナキヤ意味ガネエ」

プリン頭「な、何でだ！何で当たんねえんだよ」

ズイブント必死ダナア。

亮介「ザンネンだがもうオワリダア」

俺はそう言うのと男を遠くへ飛ばすように力一杯男の顔を殴った……。

俺の心に残ったのは三割の自分への恐怖と七割の後悔だった…。

帰り道

（亮介 side）

またやってしまった…。

俺がこうして暴走するのは別に今日に限ったことじゃない。まあこの話はまた今度にしよう。今はこの状況を何とかしなければならぬ。

考えても見てみる。最初は大人しく喋っていたのに突然キレて口調が変わり、見た目がヤンキーだとしてもかなり強く殴ったのだ。確実に青い制服のお兄さんに捕まってしまおうだろう。

さてどうしたものか…。

??? 「あ、あのっ！」

はい？

??? 「助けてくれてありがとうございます！」

思ったよりこのギャルっぽい子、意外と礼儀正しいわ。

亮介 「…いや別に気にしなくていいぜ」

??? 「いやでも…」

亮介 「本当に良いから」

何だろうこのやり取り、何だか面倒くさくなってきたぞ。

俺は取り合えずこの場から立ち去りたいのだが…。

亮介 「じゃあ俺はこれで…」

ガシッ。

??? 「なーに逃げようとしているのかな？」

はあ？逆に此方から聞いて良いか？何で腕をつかんでるのかな？

これじゃあ帰ってゲームが出来ないじゃ無いか。

亮介 「別に逃げようとしてないけど」

??? 「もう、嘘つかないの！」ギユッ

ちよつとこの人何やってんの!?!今の状況を説明すると、俺の左腕にギャルの胸が思いつき押し付けられている状況だ。

正直な話このギャル結構胸が大きいから理性がどんどん削られていくんだよね。

亮介「あの当たってるんですけど」

???「え？当たってるって何が…」

亮介／???「…／／／」

こういった雰囲気しばらく続いた。その後このギャル、いや…今井リサと警察が来るまで色々な事を喋っていた。料理が出来ると言うこと、ギャルっぽい見た目で良く勘違いされると言うこと、そして音楽に取り憑かれた幼馴染が居ると言うこと…。

く夕方く

俺達は重要参考人として警察署で色々と事情を聞かれた。

亮介「はあ…疲れた」

リサ「アハハ確かにそうだね」

因みに俺は今、リサを家まで送っていつてる途中だ。

亮介「あれ？そう言えばリサって歳いくつだっけ？」

リサ「もお〜！女性に年齢を聞くのは失礼だっと思わないの〜」

とりサは頬つぺたを膨らませている。怒っているつもりなのだろうが俺には可愛らしく映ってる。

リサ「ちよつと！何笑ってるの!？」

おつと俺は思わず笑ってしまったらしい。

亮介「悪い悪いリサがあまりにも可愛かったからさ」

リサ「か、可愛いつて／／／」

とりサがまるでリンゴのように頬を赤らめている。

亮介「わりい俺なんかしたか？」

リサ「いやなんでもないよ／／／、それよりも歳だったよね。今は中学三年生の14才、8月になったら15才だよ」

亮介「それじゃ俺と同一年だな」

リサ「そうなんだ！ねえ何処の中学校に通ってるの？」

亮介「○○中学校。でも、ついさつきフィンランドから引っ越してきたばかりだから明後日から初登校だ」

リサ「ええ！本当に!?!、今5月だよ！受験勉強大変じゃない？」

亮介「まあ確かにな」

リサ「じゃあアタシが勉強見てあげよつか☆」

亮介「本当か？」

リサ「うん☆助けてくれたお礼だと思って♪」

亮介「それなら頼む」

リサ「任せて☆」

しばらく似たような会話をしていた。

リサ「あ、ついたよ♪」

喋っている間にもう家についていたらしい。

亮介「じゃあな」

リサ「待って！」 チュ

刹那の出来事だった。だがそれは俺にとっては永遠に近い瞬間だった。

リサ「…プハア」

亮介「え、あの…」

リサ「じゃ、じゃあね／＼／」

とリサは急ぎ足で家の中に入ってしまった。

俺はいつかりサに対してこの感情の答えを出せるのだろうか。

少女の独白（白鷺千聖）

く千聖 side く

突然だが私には好き… いや愛している人が居る。

彼はとつても優しくてかつこ良くてちよつとドジなところがあつてそしてなりより私の想い人だ。

彼との出会いは私が小学生の頃まで遡る…。

く回想く

その当時、私は天才子役として全国で知らない人はいないであろう程の有名になっていた。

正直な話昔のことはあまり覚えていない、その時は仕事を覚えるので必死だったのでしよう。

周りは私のことを歓迎してくれていたが当然それを良く思わない人達も居る。

く小学校く

クラスメイト『おい！白鷺』

千聖『？何かしら？』

クラスメイト『お前最近テレビに出るようになって調子に乗ってないか？』

彼の名前は忘れたがクラスを中心にしたっていたことは覚えている。

千聖『いえ、別に調子に乗ってなんか…』

クラスメイト『じゃあなんでお前が俺よりも人気者なんだよ！』

千聖『そんな事分らないよ…』

クラスメイト『ふぎけるなよ！テメエが注目されるせいで俺の努力は水の泡だ…』 ブツブツ と何かを呟いている。

クラスメイト『そうだ…』

とまるで獲物を見つけた蛇のように私を見つめてきた。

千聖『な、何…』

クラスメイト『お前がいなくなれば…俺はまた皆に見てもらえるんだよな』

彼は何かを決意したように鞆からある物を取り出した。
ギリリと窓から入ってくる夕焼けの光に照らされた金属の刃物……
間違いないカッターナイフだ。

千聖『そんな物しまつてよ、危ないよ……』

その時の私は間違いなく彼に恐怖し、怯えていただろう。

クラスメイト『うるせえテメエさえテメエさえないければ！』

とカッターナイフを私に向かって切りつける。

彼の顔はまさに鬼の形相と言言葉がびったりな顔立ちになって
いた。

千聖『キヤアアアアツ!!』

???『危ない!!』

と言う声が聞こえた次の瞬間私は誰かに突き飛ばされた感覚を身
に感じた。

え……？

クラスメイト『お前何で邪魔しやがった!』

???『カツコ悪いよな……』

クラスメイト『何だと』

???『カツコ悪いよ……女の子一人相手に刃物向けてそれどころか暴
言……カツコ悪いじゃ無い……最低だな』

と謎の男子生徒は語り始めた。

クラスメイト『俺の努力も何も知らねえ癖に好き勝手言いやがって
!』

???『ああそうだな確かに知らねえよ』

クラスメイト『だったら何で……』

???『テメエも白鷺千聖って言う人間の努力も何も知らねえじゃねえ
か!!』

クラスメイト『なっ!』

???『確かになテメエも努力したんだろう、でもな……努力してんの
はテメエだけじゃねえんだよ!俺だって白鷺だってそれにお前の周
りの人間だって皆努力を重ねてんだよ!何で努力の大変さを知って
るお前が白鷺の努力を認めてやられないんだよ!』

クラスメイト『何なんだよ……さつきから何なんだよお前は!』
???『俺はただの小学生だ』

クラスメイト『ただの小学生が俺の邪魔をするな!』
とカッターナイフを男子生徒に向かって切りつけた。
危ない!!と言おうとしても恐怖で足が動かなかった。

きっと男子生徒は怪我をしているのだろうと怖くて目を瞑ってしまつた。

クラスメイト『な、何んで手で止めてるんだよ!』

恐る恐る目を開けてみると男子生徒がクラスメイトのカッターナイフを素手で止めている光景が目についた。

???『やっぱり痛いなく』

クラスメイト『何で後ろの白鷺を置いて逃げなかつたんだよ!』

???『お前に一つ言っておくことがある……俺は白鷺見たいに有名子役でもないし……お前みたいにクラスの中心にたてる能力もないただの小学生だけどなあ、女の子を見捨てる程、屑になったつもりはない!』

クラスメイト『ク、糞野郎が!!!』

???『甘い!!』

と男子生徒はクラスメイトのカッターナイフを避け、クラスメイトの顔に拳を突き上げた。

く下校中く

私がクラスメイトに襲われた事件は只の男子の取っ組み合いとして方が着いた。

千聖『ちよつと聞いてもいいかしら?』

???『何だ?』

千聖『何で私を助けてくれたの?やっぱり私が芸能人だからかしら?』

???『いやそれは違う。単純に助けてほしがってたら助ける。只それだけだ』

『後は…』

『君がかわいかったからかな』

その時、私は幼いながら間違はなくこの少年に恋心を抱いた。

千聖『へ、へえーそ、そうなの／＼』

千聖『ねえ、貴方の名前を聞いてもいいかしら』

『ああ、そう言えば自己紹介がまだだったな。俺の名前は矢井亮

介。よろしくな白鷺』ニコツ

千聖『ええ／＼私も自己紹介をするわね。私の名前は白鷺千聖

よ。よろしくね矢井君』

亮介『俺のことは気軽に亮介で良いよ』

千聖『それなら私も千聖で良いわよ』

亮介『それなら改めてよろしくな千聖』

千聖『ええよろしくね亮介』

く回想終了く

貴方は私を芸能人の白鷺千聖ではなく女の子の白鷺千聖として見てくれた。

なのに… ナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニ
ナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニ
ナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニナノニ
ナノニナノニナノニナノニ貴方は私からハナレテシマッタ、何で？ナ
ンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナ
ンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？ナンデ？

アハハハハ、ワカッタ ワカッタは オニゴツコガ シタイ ノネ
ソレナラ スナオニ イツテクレレバ イイノニ！ マズハ ワ
タシガ オニナノネ イイワ アソンデ アゲル ワタシガ ツカ
マエタラ アナタハ イツショウ ワタシダケノモノヨ コンドコ
ソ ゼツタイニ ハナサナイ ダカラ マツテテネ リョウスケ。

番外編く聖夜の一時く

く亮介sideく

ジングルベル、ジングルベル鈴が鳴るく非リヤは愉快にメリー苦しみます！Hey!↑(頭の可笑しい人)

やあ、やあ、やあ皆さんこんにちはー(・▽・)ノ クリスマスの夜に可愛い1つ年下の女の子と出掛けると言うわけでテンションがいつもより上がってしまったている矢井亮介だ！

可愛い女の子って言っても昔っからの友達のイヴなんだけどな。

イヴが誘ってくれなかったら俺はクリボッチと言う不名誉な称号が付属されてたんだろうなく、千聖はクリスマスマス特番で忙しい、リサや他のRoseliaメンバーはライブでそれぞれどころじゃない、他の知り合いも色々忙しいだろうし(遠い目)。

あれ？そしたらイヴが誘ってくれなかったらクリボッチ俺だけ!?(今更)。

もうそろそろイヴが来ても良い頃なんだけどな…。

イヴ「リヨウスケさん！」

あ、イヴが来たみたいだな。

亮介「ああ待ってたぞ… イヴ…」

俺は言葉を失った。

どうしよう、可愛い過ぎる… もはや天使が舞い降りたと勘違いしても仕方が無いと言い切れてしまう。

イヴ「?リヨウスケさん？」

ハッ!どうやら俺はイヴのことをずっと見ていたらしい…。

亮介「ツ!?!わりい… 見とれてた」

はあ… 絶対に引かれたなー、いくらアイドルで元モデルで人の視線に慣れていると言っても流石にずっと見るのはまずいよな。

イヴ「も、もうリヨウスケさんってば… / / (やっぱりリヨウスケさんはズルいです… / /)」

と顔を赤らめる。

亮介「どうしたんだ!?!熱でもあるのか?」

イヴ「あ、いえ…ダイジョブです」

?でも顔がものすごく赤いけどな…無理していなければ良いんだけど…。

イヴ「それよりも早く行きましょう!」

イヴはそう言うのと俺の腕に抱きついてそのまま急いで走っていく。
はあ…よっぽどクリスマスが楽しみだったんだな。

〈数時間後〉

亮介「いやー楽しかったな!」

イヴ「ハイ!色々なお店をリヨウスケさんと一緒に行けて楽しかったです」

あれから俺とイヴは色々なお店やカップルが行くような施設を回った。

因みに俺らは今、イルミネーションが綺麗に輝いているスポットに居る、ちよつと見渡せばカップルらしき人達がちらほらと居る。

イヴ「あの…リヨウスケさん…」

イヴの顔を少し見ると緊張と恥ずかしさが混ざったような何とも複雑な表情をしていた。

亮介「なんだ?イヴ」

イヴ「今のワタシ達ってカップルに見えるのでしょうか…」

亮介「さ、さあな俺には分かんないや…」

俺はイヴの質問に対して素っ気ない対応をしてしまう。

イヴ「そうですか…」

イヴは落ち込んだように肩を落としている。

亮介「い、いやイヴが彼女っていうことが嫌だっていう訳じゃ無い

んだ… むしろ俺なんかがイヴと釣り合わないで思うんだ…」

イヴ「そんなことはありません！」

亮介「急にどうしたんだ!? イヴ」

イヴ「俺なんかつて言わないで下さい! リヨウスケさんはとってもカッコイイです! どんなことにも一生懸命なところが私は誰よりも好きなんです!」

イヴが大きな声で言う。

亮介「え、今イヴ俺のことが好きつて…」

イヴ「ハ、ハイ… / / / 私はリヨウスケさんのことが好きです…

／／／

亮介「ハハ、俺は最低だな… 女の子から告白させちまうなんて…」

イヴ「そんなこと無いです… リヨウスケさんはいつも真剣で人一倍ドリヨクしています… そんな人がサイテイな訳が無いです」

亮介「俺が君の隣に居ることが許されるのかな…」

イヴ「ワタシは一緒に居てほしいです…」

ああそうかこれが答えだったんだな…。

亮介「俺からも改めて言わせてくれ… 若宮イヴさん俺と付き合い合ってくれませんか…」

イヴ「ハイ! こちらこそよろしくお願いします!」

勘違いかも知れないが星に照らされた雪とイルミネーションが俺達を祝福しているように見えた。

おっとり系美少女が現実にはいない件について

〈亮介 side〉

他の人達は転校をどう捉えるのだろうか。

新しい日常やクラスメイトにドキドキと胸を膨らませるポジティブな人も居るだろう。

逆にあまり転校に良いイメージを持たない人も居るだろう。

俺はどっちかと問われたら間違いなく後者の人達に属する。

別に何も理由が無く転校に良いイメージを持ってない訳じゃない。考えて見てほしい転校生あるあるとして、何故か転校生は必ず高スペックを求められる、卒業アルバムを見てクラスメイト達が盛り上がってる時に転校生だけあまり会話に混ざることが出来ない、それに中学三年生だから受験勉強でめっちゃくちゃ忙しい!! 詰んだ。

因みに俺は今、○○中学校に登校中だ。

まあ良いや取り合えずこの事は忘れて学校で勉強を頑張って、最低限友達を作ること为目标にしよう、うんそうしよう。(現実逃避)

??? 「ふええ... ここ何処... ?」ウルウル

俺の目の前には水色の髪にアメジストのような瞳をしている少女が何やら迷子っぽい様子だ。

うん、俺はあれかな? ラノベの主人公見たいにトラブルに巻き込まれやすい体質なのかな?

だけど、何もしないわけにはいかないな、このまま涙目の迷子らしき少女を放置したらしばらく罪悪感に押し潰されそうだからな。

亮介 「あの? 大丈夫ですか?」

??? 「ふえ... ?」

はい不審者確定ですねこれは、そりやそうだよね今の時代電車に乗って女性が『この人痴漢です!』と言えばあつという間に警察が来てブタ箱にぶちこまれる時代だからな。

??? 「す、すみません... 道に迷っちゃて...」

あつ、ガチの迷子だったわ。

亮介「それで何処に行きたいんですか？」

???「あの…この駅なんですけど…」

亮介「あぁーこの駅ですか、よかったら俺が案内しますよ」

???「本当ですか！」

亮介「はい、任せて下さい！」

花音「ありがとうございます、あの…私の名前は松原花音って
います」

亮介「俺の名前は矢井亮介です気軽に亮介で良いよ松原さん」

あれ？この会話何処かで…？

花音「それなら私も花音で良いですよ」

亮介「ならよろしくな花音！」

花音「うんよろしくね…亮介君」

（移動中）

亮介「そう言えばさ花音」

花音「何？亮介君」

亮介「今日は平日なのに何で私服で外に出てるの？学校は？」

まさか…こんな可愛いのにもしかして不良!?

花音「えへへ、今日は学校の創立記念日だから学校はお休みなんだ」

花音は嬉しそうに微笑む。

休日素直に喜び盛り、彼女もやはり学生なのだろう。

花音「そう言う亮介君は？学校はどうしたの？」

亮介「ハハハ、恥ずかしい話なんだけど朝早く起きて学校に来たのはよかつたんだけど起きるのが早すぎたみたいで時間を持て余してたんだよね」

花音「フフ、そうなんだ」

面白かったのか花音から可愛らしい笑みが浮かんでいる。

亮介「花音、駅に着いたよ」

花音「本当だ、ありがとうね亮介君」

亮介「いや、気にすんなよ困った時はお互い様だろ、俺そろそろ学校があるからじゃあな、また会おうぜ花音」

花音「あつ、亮介君待って！」

亮介「?どうした？」

花音「また今度お礼させて…」

亮介「別にお礼なんて良いよ」

可愛い少女を助けられたんだそれで充分だ。

花音「ダメ…かな？」

花音は俺の目を見つそう言ってくる。

花音の背丈は俺よりも低いため自然と上目遣いになっている。

亮介「いや、そういう訳じゃないけど…」

花音「それなら良いよね」

亮介「はい……」

それから花音と連絡先を交換し、今度の日曜日に一緒に出掛けることになった。

自己紹介って何で緊張するんだろうね？

〇〇中学校・教室3―2

亮介 side

担任「矢井君、自己紹介お願いできるかな？」

亮介「は、はい」

やべえ… 変に緊張してきた…。

俺は花音と別れた後、無事に〇〇中学校に着くことができた。

その後、俺は職員室へ行き担任に教室まで案内をしてもらった。

まあ良い本題に戻ろう、担任に自己紹介をするように言われた。

自己紹介？俺はクラスメイトのコイツらに何を話せば良いんだ？

どうせ、俺のことなんてどうでもいいだろ。

適当に済ませるか…。

亮介「… 矢井亮介です、趣味は読書です、一年間よろしくおねがいします」ニコツ

よし、読書が趣味と言う自己紹介の内容に困ったときに取り合えず言うであろう言葉を言ったぞ…。

でもさ、1つ気になる事がある… 女子達はさあ何で俺と目を合わせてくれないの？まさか… 転校早々クラスの女子全員に嫌われた！

担任「えーっと、皆、矢井君に何か聞きたいことがあれかな？」

出た、出ましたよ転校生に質問タイム。

この時間、結構ストレスが溜まるんだよね。

女子「はーい！」

担任「それでは〇〇さん質問をどうぞ」

女子「矢井君は前の学校では彼女とか居たりしたの？」

うわあ… 非リヤには禁句の質問だ。

亮介「いいや、彼女は居なかったよ」

うん、微妙な空気になったぞ… 何故、女子達はガッツポーズしてるの？もしかして、人の不幸を喜んでる!? だとしたら、かなり性格悪

くない？

担任「他に何か質問は…」

男子「はい」

担任「○○君どうぞ」

男子「スポーツは何をやってますか？」

亮介「剣道をやりました」

俺が剣道をやりはじめたのは主に父の影響が大きいと思う。

それにフィンランドに居たときに、竹刀を素振りしているところをイヴに見られ、イヴに剣道を教えたのがここまで剣道が続けられた理由だろう。

数分、クラスメイトからの質問攻めにあっていた。

〜数分後〜

担任「それじゃあ、矢井君は間冬（まとう）君の隣の席でいいかな？」

担任は茶髪のちよつと気の弱そうな男子生徒に指を指す。

亮介「分かりました」

蒼真「えっと、よろしくね矢井君」

亮介「よろしくな、間冬」

蒼真「僕のことば蒼真で良いよ」

亮介「じゃあ蒼真で、なら俺のことは亮介で良いぜ」

蒼真「うん、分かったよ亮介」

〜放課後〜

蒼真「じゃあね、亮介」

蒼真が俺に向かって手を振って居る。

亮介「おう、じゃあな蒼真」

蒼真に向かって手を振り返す。

それから10分くらいたった時だろうか、誰かにつけられている様な気がする。

大抵は気のせいだったりするのだが、確実に足音や視線を感じているのだ。

あつちから何もしてこないなら別にどうってことない。

そうしているうちにもう家に着いていたらしい。

???
side

??? 「フフツ、モウスグデアエルワネリヨウスケ」

あまり会いたくない人ほどよく会うよね

日曜日

〈亮介 side〉

ついにこの日が来た、と心の中で呟いた。

今日は花音と一緒に出掛けることに成っている。

両親にこの事を話したら泣いて喜ばれた。

何でも、自分の息子が女の子とデートをすることに感動しているとのことだ。

いや、デートってなによ、確かに男女が日時を決めて出掛けるからデートなのかも知れないけどそれだとまるで花音が俺に気があるみたいに聞こえるじゃないか……。

俺は今、待ち合わせ場所の噴水の前にいる。

そろそろ来る頃だと思うんだけど。

花音「亮介君」

亮介「おはよう花音」

花音「うんおはよう、ごめんね…… またせちやって……」

花音は申し訳なさそうに言う。

亮介「大丈夫だ、花音。俺もそんなに待ってないし」

あれ？なんかこの会話デートっぽくない？

亮介「出掛けるって言っても何処に行きたいんだ」

花音「水族館に行きたいんだけど良いかな？」

亮介「ああ良いぜ。なら早速行こうか」

花音「うんっ」

花音は嬉しそうに微笑んだ。

〈水族館〉

亮介「水族館に着いたけど何処から回ろうか」

花音「クラゲの方に行っても良いかな」

亮介「分かった」

亮介「クラゲ綺麗だな」

何故だか知らないが…水槽の中でゆらゆらと揺れるクラゲを見ていると落ち着いた気持ちになってしまう。

花音「そうだね…」

花音もそういう気持ちになったのか、少し目を細めてじつとクラゲを見つめている。

亮介「そう言えばさ…」

花音「ん？何？」

亮介「花音は何で俺を誘ったんだ？、お礼って言ってもここまでするでもないのに」

花音「え、ええとその…」

どうやら俺は不味いことを聞いてしまったらしい。

亮介「言えないことなら良いんだ」

花音「亮介君!!」

花音はいつもの様子からは想像が付かないほど大きな声を出し、覚悟を決めた目をしていた。

幸いだったのは周りに人が居なかったことだろう。

花音「私、松原花音は亮介君のことが異性として好きです」

まるで時が止まってしまったのでは無いかと思うほどに衝撃的な言葉だった。

亮介「あの…」

俺は言葉に詰まってしまった。

花音「返事はまた今度で良いよ」

亮介「うん…」

花音「それじゃあ行こっか」
亮介「うん…」

俺は花音への返事を思い付かずその後も花音と一緒に水族館を回った。

夕方

花音「楽しかったね」

花音は何事も無かったかのように微笑んでいる。

亮介「そうだな」

実際楽しかった、さすがに告白されるのは予想外だったが…。

花音「私、帰り道こっちだから」

亮介「ああ、じゃあな花音」

花音「うん、じゃあね」

にしても俺はどうしたら良いんだ…俺は現在イヴと結婚を前提に付き合うと言う約束をしていて、リサにキスをされ、花音に告白をされた。

きつと誰かの気持ちに答えるってことは誰かの気持ちを裏切るってことなんだよな。

そんな考え事をしている最中、最も会いたくない人物に出くわした。

100人に聞けば殆どの人が美しいと言う容姿、絹の様な白い肌、二重のくつきりとした目、パステルカラーの黄色い髪。

間違いない白鷺千聖だ。

千聖「久しぶりね、亮介」

その何万回も聞いた美しくもとても恐ろしい声が俺の脳を揺さぶった。